

## 研究資料

### 国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻

——詞書公刊ならびに影印(下)——

綿田稔  
土屋貴裕  
大月千冬  
佐藤直子

あり我昔世にありし時右近の馬場に遊ぶ事多年都辺閑勝の庭彼所にしくはなし然に非分の罪を蒙て鎮西へ

おもむくといへとも竊に彼所に行て遊ぶ時のミそ心の焰すこし消る心地するほこらを構て立寄便をえせしめよと仰有ければ身の程のいやしさに右近の馬場にハ不叶しておのれか家の辺に崇たてまつりて五年の後天  
暦元年六月九日今の北野にハ遷したてまつるとそ日本記にハ侍る

(絵 あや子託宣、小祠を構える)

(第二段)

天慶九年に近江国比良宮にして彼祢宜良種か子七歳になる童に御託宣有彼記文にくわしく見えたり吾物の具こゝに來たりはしめて納をけり仏舍利玉帯銀作の太刀笏鏡也我侍徒老松福部といふ二人あり笏をは老松にもたせたり舍利をハ福部にもたせり是等ハ筑紫より我ともに來たる者也此二人ハはなはた不調の物そこゝろゆるすな我居たる左右に可置老松ハ我にしたかひて久しく成ぬこれして吾ゐたる所に松の種をまかする也我昔

卷第一・卷第二(四一〇号)  
卷第三・卷第四(四一一号)  
卷第五・卷第六

凡例

- 一、異体字、変体字は現行のものに改めた。
- 二、行取りは原文通りとした。
- 三、( ) は翻刻者の註記である。

### 巻第五

題箋「大政威徳天縁起第五」

(第一段)

大政威徳天縁起巻五

天慶五年七月十二日西京二房に住

ける賤のむすめあや子といふ者に御託宣

国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻 詞書公刊ならびに影印(下)

大臣たりし時夢の中に松の身に生て  
即おれぬと見えしハなかさるへき相なり

松ハ我形也我噴意の焰天に満て諸の

雷神鬼神皆我徒類と成ぬ十六万八

千也我所行の事ハ世界国土の災難たり

帝尺も一向にまかせ給ふ不信の者をハ

雷に仰付て踏ころさしめんあはれかく

云計そや世界に我をかなしむ衆生を

見るにいかにしても救たすけんとのミ

覚ゆる筑紫に有し程ハ常に仏天に

あふきて願せし様ハ命露落なは

当生に我ごとくおもハさる災にあたり

侘かなしまん者をハ扶救人を損し讒

言せんを糺身とならんと願しに如思になれり

我社辺にて鹿鳥ころす事なかれ噴意

発る心出来たれり皆人々ハ賀茂八幡と

のミ申て我をは何共おもはぬやわれを

頼まん人を守んと思ふ心ふかしいつれの

神達なり共我をえおしふせ給ハし

右近馬場こそ興宴の地なれ彼所に移り

ゐてあらは松を生やすへし我此界に

ありし間に公事共行て仏物を申留たり

天台山の堂寺の燈油分を留たりし

其罪ふかくして自在の身と成といへとも

苦惱なる事は多し其とかを謝せん

ために法花三昧の堂をたて、読誦を

至し大法の螺を吹ならはいかにうれしからん

一大事の因縁ハ不思議也後集に載ら

れたる雛家三月

雁ネイネチ・是黏持ネ疑ヒト繫ツナ帛カト 雁ネ・頭点著アシヤクシテ憶レ帰レ家ニ

と云此句を常に詠せんいかにうれし

か覽と云て童部夢覚にけり

(絵) 童子託宣、海岸の鳥居と松)

(第三段)

良種此託宣の文を身にそへて右近の馬場に

来たりつ、朝日寺の住僧最鎮法儀鎮世

にむかゝて子細を評定しける間に一夜の

中に松生つ、忽に数歩の林となり神

靈眼にあらはれて万人の種植たるか

ことし即最鎮と狩の弘宗伴類寺主

満星川秋永と力を合心を一にして崇

あふき奉る靈験殊に勝れ賞罰掲焉

也天曆元年より天徳にいたるまで

十四年の間に御殿造替之事五箇度也

(絵) 社殿建立)

(第四段)

天徳三年〔己未〕九条右丞相屋舎をつくり

まし、宝物を備へ奉り給ける其祭文云

朝廷之間仁波古名遠久揚天高久崇班仁昇里

給度四海之内仁波舟楫土志天細意紀仁任世夜

亭之後仁波令跡垂天普久祈天禱叶一天

下之尊卑護持志給事自在因茲天師モロ

輔力遠波竭志誠致天奉事無レ極夜乃守利

日乃守土幸給天男女乃子孫口品々仁男遠波國家濃

棟梁登之天乃撰録遠任意世及太子祖土成之

女遠波國母皇后帝王之母土之天我姓藤原之氏千子濃

世仁名遠傳乃孫乃家仁跡遠繼天天神乃此地爾鎮

里御坐爾隨天二儀仁比之天不衰留氏土夜守日守仁

守幸賜江土恐美恐美申須登

こそ侍れ九条殿之繁昌信心ましますせ

はいよく御恵ミなりとそ覚へ侍る

(絵 北野社頭)

(第五段)

天徳四年九月之比最鎮か夢に北野の上

より墨雲一村引覆と見る程に雷電鳴

いて、右近之馬場より内裏の上に落かと驚き

あさましくおもひ侍しか幾程を経すして

同九月廿三日内裏焼亡出来にけり高も

賤も東西に馳走し南北に騒動す是

偏に天満天神の眷属の所行也其時そかし

内侍所の御鏡南殿の桜の木に飛うつらせ

給て光を放たせ給ひけり見る人則悶絶す

爰に北野左大臣と申人參給ひて御直衣

のたもとをさしいたしてしはらく

祈念申されければ飛入せたまひ

けるとそうけ給侍る

(絵 内裏炎上、桜の木に衣の袂を差し出す左大臣)

国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻 詞書公刊ならびに影印(下)

(第六段)

円融院御時貞元々年より天元五年に至る

まで内裏焼亡三度まで有けり其時番匠共

集て南殿のうら板に鉋を懸て次の朝參して

見ければ裏板すこしす、けたる所有あやしと

おもひて能々見ければ一夜の程にあさやかに虫くひ有けり

つくるとも又も焼なん菅原や

むねのいたまのあはんかきりハ

これを見る人不思議のおもひをなし

けると申つたへ侍る

(絵 裏板の虫喰いを発見する内裏の番匠)

(第七段)

一条院御宇に正三位従一位左大臣の官位を

送り奉り給き彼詔書等勅使菅原之幹モト正

正暦四年八月九日太宰府に下向同廿日未時に

安樂寺に參して御記之箱を案の上に指置

再拜して読上給しに一の絶句の詩化現し

侍りけるそ第一之不思議とおそろしくこそ

忽ニ驚テ朝使ニ排ケハニ荆棘一官品高ク加テ拜感成ス

雖レ悦ト三仁恩ノ覃ニコトヲニ遂ニ願ニ但差クハニ存没左遷ノ名ヲ一

件正文は外記之局に納られけり道風之筆

跡すこしも違ハさりけり誠に弘法大師の菅

丞相ハ我遠世之身也小野道風ハ順世の身也と

示し給へるも是にてそ実事とハおほゆれ

今度の勅答タウ神慮猶心よからすと僉議有て

同五年に正一位太政大臣の官位をは贈りた  
てまつらせ給ひける一の詩をは御託宣有ける

昨ハナリハ為ニ北闕ニ被レ悲シ士ト 今ハ作ニ西都ニ雪ル恥ヲ尸一ノト  
生テ恨ミ死ノ歎ヒ其レ我レ奈イカ 今ハ須ク望ミ足テ護ル皇基一ヲ  
此詩を一度も詠せん人をは毎日七  
度守護せんと誓を御しけり

(絵 安楽寺に参じる幹正)

卷第六

題箋「大政威徳天縁起第六」

(第一段)

大政威徳天縁起第六

北野宮の御繁昌ハ天曆の聖代よりはし  
まりていまにあらた也官位をもとめ寿福を  
ねかひ智慧才学をあらそひ臨終正念を  
祈る類ひ二世の望不叶と云事なし

待賢門院末後の宮と申ける時女房の  
衣のうせたりけるをあやしきさまにいはれ  
ける女房七日北野に参籠して

おもひいつやうき名立身ハうかりきと  
あら人神になりしむかしを

とよめりけれハやかて其日しき  
しまといふはしたものととりたるか  
手つからさ、けて鳥羽院の御前に  
まいりたりけり

(絵 盗んだ衣を被つて鳥羽院の前に出る敷島、それをのぞき見る女房)

(第二段)

治部卿通俊の子息に世尊寺の阿  
闍梨仁俊とて顕密修学の貴僧あり  
けり女心有よしを鳥羽院の女房たちの  
中より申いたしたりければ彼阿闍  
梨北野に参籠して祈精申て一首詠  
し申されける

あはれとも神くならは思ふらん  
人こそ人の道をたつとも

と読たりける時彼女房紅の袴計  
うつほに着て手に錫杖を振て仁俊に  
虚言いひ付たるむくおよとてくるひ  
舞ければ阿闍梨をめしてたすくへき  
よし被仰ければ神呪をみて、けるに  
則くるひ覚てけり叡感のあまり  
仁俊法師に薄墨といふ御馬下  
し給ひ侍る

(絵 狂女を鎮める仁俊と下賜される馬)

(第三段)

仁和寺になにかしの阿闍梨とかやいふ僧  
西京の御旅所に神輿をハします御前を  
車に乗ながら通りけるに其牛た  
はれて死しけり阿闍梨とり袴して

歩行てをそれおのゝきて帰りしなり  
其日より病付て一二年なやミて様々の怠状申  
いきたりけるかやうの不思議多し揚篤くき  
こゆる大方齡か算もをきつくしかたし  
誠に信仰利生も早く不信なりときにハ罰を  
蒙物かな

(絵 旅所前を牛車で通り過ぎようとする某僧)

(第四段)

八月四日の御祭ハ村上天皇の御時  
よりはしまり公家の御沙汰として  
大藏省の勅あり神威嚴重也仲  
秋四日赤日西山にか、やき青芝北  
野に見え渡る一条西大宮をみれば  
左右の八女打ませのさし繩もろ綱  
にはらせて右近馬場をわたることお  
もしろくハ侍れ御輿御殿に入給へハ  
獅子鼓耳を動し巨部(音)の笛の音も澄  
上る一夜松の風ハあつま琴を調へ住  
僧の錫杖以清浄心の声貴く聞へ駕輿  
丁のおのことも蛮絵の装束に甲を着  
なから八女のわき向かひには、咲たるかほ  
気色和光同塵の方便とあはれにおか  
敷侍れ朱(ア)の玉かき色まし露梅林の  
ひかりをそへ一人の神馬御宝殿を引  
廻し十列の乗しり前後のあらそひも  
たくひなくこそ侍れかく目出度大会を

拝見し樂所饗膳ことすき法音天に  
澄上り伶倫呂律を調ふ音楽耳目を  
驚し周瑜婆沙の態廻雪秘曲をつく  
す法会行道の終りに左右のすまひの  
かた屋に左右の庁各我方勝事ををき  
て、あらそひたるこそおもしろく侍れ爰に  
大江の匡衡さまの供物色々の御幣を  
捧て奏状をそまいらせける其夜の夢に  
匡衡見たまひけるハ天神御戸を押開け給て  
いつれも心肝に染ておほゆるとそ被仰ける  
抑日月を天上の果報とす天眼ならすハ争  
推へき既汝神に通す我ハ是十一面觀音  
也と示し給て夢覚にけり其時よりして  
こそ天満天神の御本地ハ觀音の御垂  
跡と貴賤存知申けれ忝哉一天四海の主  
万民拙きまでに帰命の首を傾随分志  
を運て各々現当二世の所望を祈る方今  
菅家の宗廟を拜奉れば廿二社の末社  
軒をならへ千万騎臨幸を致し一人鎮  
護の誓をあふき万性帰依の寔を抽つ  
冥感通する事水月の如し靈鑑  
又鏡の像チを複すに不レ異是則觀自在  
尊の化現衆生済度の御方便也三称我  
名不往救者不取正覺も經に説けり凡三十  
三身に体を分化度利生まちくレに誓したまふ  
別而十一面の尊容利益ことに勝たり弘  
誓の底もなくたれ人の心水にか朝崇  
せさらん大慈の雲無辺也何の処にか

覆フクハさらん誠には権扉化入の道普門

功德のあまりより出たり凡現世の利

益をあふき内にハ大慈大悲の薩埵外にハ

天満天神の靈威を示し給ふ人の世にある

たれか仏神の加護をたのまざるたれか

内外の利益をかふらざる然則壽命を

ねかふ人ハ壽命かならず延官位を祈れハ

官位忽に來る惣而人界の願望ハ壽命

長遠にして此界より極樂に生ずる

ハ望の中の望悦の中のよるこひ也

如來薩埵名ことなるといへとも弥陀

即觀音々々即弥陀内證外用は一なり

觀音ハ是天神々々ハ是觀音也然即

敬神の功を積て成仏のはかり

こと、し觀音の來迎にあつかり

て弥陀の淨土に詣てん事何の

うたかひかあらむ哉觀音の示

現和光方便まことにもつて可

信可仰矣

(繪 一基の神輿と獅子頭の行列、神前相撲)

(第五段)

後三条院御時延久二年九月の比にや

仁和寺の池上に西念と云ふ僧歳

五十はかりなる有けり百日北野に

參籠して昼夜祈誓被申けるけに

見えければ見る人いかなる無実

などおひたる哉らんとあやしくおもひ

侍るに九十三日と云ふ暁師匠に

契たる僧を呼て泣々よるこひ語

やうハ年來の所望既に成就し候ぬ

此正月に熊野那智の御山に參て百

日籠て臨終正念往生極樂の日慥に示

給へと祈り申に百日に満する夜の夢

に御戸をひらきて七十余なる老僧

のけたかき体にて告示し給やう

汝か申旨是にて示しかたし北野の

宮に參して可申也云々依之当社に

參籠する処に夢うつ、共なく御殿

より直衣の御袖はかりいて、汝申

所たやすからず乍去往生極樂の

志念比也來年時正日といハん朝を

可期不断念仏怠ことなかれ但願力

を資えこ、ろさし浅からされは往生や

すきに、たれ共臨終の期にのそめは

魔縁さそひ來たりてとくる事かた

し我其期守て往生成就せしむ

へき也と慥に示現を蒙り給也と

泣々慌て出にけり無疑時心の其期異香室に

薫し紫雲其砌にたなひきて往生

の素懷をとけにけり

(繪 西念、熊野で老僧に会う夢を見る)

(第六段)

白河院の御時承保二年の比西の

七条に銅細工ありけり女子二人もち  
たり姉ハ十四妹ハ十二の時其母お

もく煩てねん比に夫に申けるやうハ

穴賢此子共有つけん程ハ人かたらひ

たまふなと返々いさめちきりて其身

むなしく成にきされ共世の習程なく

妻を迎てけり其妻此女子共をにく

ミ毎に触てあたみけり或時ハ四五日

なんとも食事をあたへず寿命も絶ぬへ

き折節おほく侍りけれどもおもひ

なから月日を送るさても可有なら

ねはさすがに物の心なきにしもあらず

おと、いつれて北野に籠て夜る昼

涙をなかし宿報のつたなき事おもひつ、

けてひとへに天神に祈り申て我等

たすけ給へうせにし母の孝養報恩

も不叶此身ならは命をめすへきよし

信心ふかく祈申ける折節播磨守有

忠と聞ゆる人参詣しけるか此女子

共あやしと見て近くより子細をた

つぬるにあはれるためしなりければ

むかへとりて姉をは妻とかたらひ妹をは

宮仕させしに甲斐く敷よき子とも

まふけてめてたくて久現世の父を敬他家の母を

訪ける御託宣ハ忠孝の志念比なるによりて感応

有てかやうの幸に引合侍ると也只是のミにあらす二世の所願

一生の所望朝に祈り夕に賽する類耳に満眼に

さいきる者也貴哉

(絵 銅細工の女房の死、姉妹の北野参籠、姉から子細を聞く有忠)

(第七段)

天満天神の御利生方便によりてこの

女房大国受領の北方となり子孫繁

昌家門榮耀志して堂塔をつくり仏事を

いとなみ老期に出家して往生の素懐を

とけ現当二世の所願所望のま、に

とけ給る、とかや凡官位をいのる

人一日九遷の榮路にす、ミ延齡を

ねかふともから梅生松子か籌算をた

もつ富貴を祈れば陶朱隕白か地に

ほこり望ハ苑池宝閣之境にミたん文章ハ

日新か性を授奉公ハ月俸か賞にあつ

からん神明仏陀世にお、く御座といへ共

聖廟の効験いちしるく天神の

御めくミにしくハなし家々の日記

あまねしといへともいさ、か九牛か一

毛をぬき後素にあらハすなり

云々

(絵 繁昌する有忠と姉の家)

(奥書)

城州乙訓群開田庄薬水場寺例宝也

右六卷縁起古本雖有之破損之条

新書写記於事書者愚翰甚憚

巨多也雖然応施主之懇志不恥諸人

嘲哢寔恐怖々々寺院再興鎮社瑞

籬安全庄内繁昌別而明神守護所願成弁

天文七年<sup>戊戌</sup>十一月廿五日中午少路山城守宗綱成之

(裏書)

其大願主藏福寺之

当住長首座多年

之望忽令成者也

併氏子勸微少之志

如此調之弥 天満大

自在天神自他円満

二世悉地所願如意

之冥心可願々々

右事書壹部右筆

木上山海印寺住侶東流

末資寂照院大阿闍梨

法印泉雄<sup>春藤 五十二</sup>

此内於四卷能勢与三

頼直<sup>廿三</sup>俗弟子故為冥加

令書之畢

図版要項

一 大政威徳天縁起絵巻 卷第五 社殿建立(原色刷)

二 同 卷第六 八月大祭(原色刷)

三 同 同 銅細工師姉妹・奥書(原色刷)

紙本著色 卷子装 卷第五 縦三一・五cm 全長一一〇二・四cm

卷第六 縦三一・〇cm 全長一一四六・三cm

フランス 国立ギメ東洋美術館蔵

一一三 綿田稔・土屋貴祐・大月千冬・佐藤直子「国立ギメ東洋美術館蔵 大

政威徳天縁起絵巻——詞書公刊ならびに影印(下)——」参照

一一三 城野誠治撮影

(わただみのる・企画情報部文化財アーカイブズ研究室長)

(つちやたかひろ・東京国立博物館)

(おおつきちふゆ・共立女子大学非常勤講師)

(さとうなおこ・元成城大学大学院)



△第1紙

△第3紙

△第2紙

△第4紙

△

△第5紙

△第7紙

△第6紙

△第8紙

△

四六

△第 9 紙

△第 11 紙

△第 10 紙

△第 12 紙

△第 14 紙

△第 13 紙

△第 15 紙

△

△第 16 紙

△

△第 17 紙

△第 18 紙

△第 19 紙

△

△第 20 紙

△第 21 紙

△第 23 紙

△第 22 紙

△第 24 紙

△

△第 25 紙

△第 26 紙

△第 28 紙

△第 27 紙

△第 1 紙

△第 2 紙



△第3紙

△第5紙

△第4紙

△第6紙

△

△第7紙

△

△第8紙

△

△第9紙

△

△第10紙

△第12紙

△第11紙

△第13紙

△

△第 15 紙

△第 14 紙

△第 16 紙

△

△第 18 紙

△第 17 紙

△第 19 紙

△

△第 21 紙

△第 20 紙

△

△第 23 紙

△第 22 紙

△第 24 紙

△第 26 紙

△第 25 紙

△第 27 紙

△第 29 紙

△第 28 紙

△第 30 紙

△